

# 日系アメリカ文学の発祥を求めて

— トパーズタイムズを中心に part 2 —

The Origin of Japanese American Literature From Topaz Times part 2

山本茂美

Shigemi YAMAMOTO

## はじめに

日本人がアメリカ合衆国に渡ってから150年以上の歴史を持つ。最初に渡った人々の理由は様々であるが、やがてアメリカ合衆国に定住する人々も増えていった。彼らは、アジアの人々が白人中心の社会に住むことの数々の困難を乗り越えながら、アメリカ社会の中に入り込んでいった。多くの差別の中、1つ1つの難関に立ち向かい、少しずつ日本人社会から白人社会へと入っていく。

その時々喜びや悲しみを、彼らは詩や俳句にしたためていった。数々の作品が日系新聞に投稿されている。その中心となったのが「ユタ日報」であった。日系人社会において日系新聞は大きな影響力を持っていたという。英語の理解できない一世の大切な情報源であり、二世を含めた二系人達の文化交流の場所でもあったという。やがて詩や俳句だけでなく小説などの発表の場にもなっていた。

その後、第二次世界大戦が勃発し、日系アメリカ人は強制収容所に入れられることになった。いくつかの収容所に分かれて日系人達は収容されることになるが、それらの収容所でも情報源としてのコミュニティ雑誌が発刊された。

昨年「ユタ日報」についての研究を進めたが、この研究では、「トパーズタイムズ」というトパーズ収容所で発行された新聞を通じても、同じように文学作品が掲載されているか、またその内容が戦後の二世を中心とした作品にどのように影響を及ぼしたかを研究していく。なお「トパーズタイムズ」は、復刻版として10巻出版されているが、この論文では、後半の6版から研究をする。

## 1 トパーズ収容所の背景

それでは、トパーズ収容所ができた歴史的背景を追ってみたい。

1941年12月7日に、日本帝国海軍の真珠湾攻撃直後から、FBIが日系社会の要人を次々と敵性外国人収容所へ送った。しかし、アメリカ世論は日系人に対して冷静であったという。

1942年の1月から2月はじめに、様々な組織からの排日運動が開始された。1941年12月15日にノックス海軍長官がハワイを視察した帰路、第5列活動がハワイでなされたという不正確な情報を発表したことで排日運動は激しさを増していった。第5列活動とは、適の勢力下で果報活動やかく乱工作を行うことを

さす。

1942年1月には、排日的なマスコミや組織の格好の話題となり、日本軍が攻めてきたとき、西海岸地区にいる日系人が呼応するという恐怖を西海岸の人々に与えた。

このような排日活動がそれぞれの組織を支持基盤とするカリフォルニア州選出議員を経てワシントンにも伝えられ、1月15日、連邦下院のマーチン・ダイス議員が下院で、28日に第5列活動が存在した事実を握っていると公言した。誰も見ていない活動は、実在したものと報告されるに至った。

このため、西海岸から日本人は立ち退くことになった。3月2日、デウウィット將軍は、西海岸の3州の西半分とアリゾナ州の南の3分の1を軍事地域と設定して、そこに住む「日本人を祖先とする全ての人」がそこを立ち退くべきことを宣言した。

そして3月11日、ベンデッチェン大佐を長官として、立ち退きを指揮する戦時民事管理局WCCAを発足させた。また、3月18日にはルーズベルト大統領が大統領令9102号を出し、戦時転住局WRAの創設を命じ、初代長官にアイゼンハワー將軍の弟ミルトン・S・アイゼンハワーが任命された。

1942年3月24日に、最初の強制立ち退き命令が出され、3月30日までに、シアトル近くのプヤラップ陸軍仮収容所に収容された。

強制立ち退き命令から実施までは1週間程度しかなく、提携品はa) 家族全員の寝具とリネンb) 家族全員の化粧品c) 家族全員分の着替えd) 家族全員分の什器e) その他の重要な身の回り品（ペットは不可）とされた。そして、この荷物は手に持てるもののみとされた。

この品物や、当時使われたかばんなどは、ロサンゼルスのアメ리카日系人博物館に展示されているが、一世達がいかにわずかな品物

しか持てずに転住したかがよくわかる。

多くの不動産を不当な処理に任せる事しかできなかった日系人達は、失望の中で、仮収容所や戦時転住局に移った。この仮の収容所は、全部で16箇所、ワシントン州のビュアラップ、オレゴン州のポートランド、アリゾナ州のメイヤー、そしてカリフォルニア州には13箇所作られた、メリスビル、サクラメント、スタットレン、タンフォラン、ターロック、メルセド、サリナス、パインデール、フレズノ、ツウラレ、サンタアナ、ボモーナ、マンザナールである。

これらの仮収容所は、競馬場などで、有刺鉄線に囲まれ、機関銃のすえられた場所だった。これらは1942年11月3日までに、仮収容所から転住所に変えられていった。その後、マンザナールは転住所と改称され、その後も転住所として使われることになった。

戦時転住局の転住所は、全部で100箇所あり、その場所を決定する条件は、トーマス・D・キャベルという農業専門家のアイデアだったという。

彼は、日系人の、農業専門家としてもアイデアを活用し、荒れた土地を肥沃な農地に変えさせる手段として考えていたという。

このようにして開設された収容所の1つトパーズ収容所とはどのようなところで、その中で出版された「トパーズタイムズ」とは、どのような新聞なのか注目したい。

## 2 トパーズ収容所について

トパーズタイムズを研究するにあたってまずトパーズ収容所とは、どこに所在するかを見してみる。

トパーズ収容所は、ユタ州ミラード郡に属し、セビル（Sevier）砂漠の東端に位置している。ソルトレークシティーの南140マイルの所で15マイル東方にあるデルタが最寄り

の町で、ここまでは鉄道がある。全敷地17500エーカーの中で、居住区は1平方マイルである。

トパーズは、海拔4700フィートで、以前は湖底だった平坦な地形である。アルカリ塩基を多量に含んでいるため植物が育ちにくく、砂漠地帯である。夏は40℃冬は氷点下に温度が上下する土地で、風が強く、ほこりのひどい土地である。

ここに住んでいたのは主に、サンフランシスコ湾岸地域から連れてこられた人々で、ピークには8778人となったこともある。この住民の割合は、35歳以上の一世が3129名、35歳未満の二世が5299名という報告がある。さらに住民の8分の5は、米国民だった。

それでは、彼らの住居は、どんなものであったかも記載したい。家族単位で割り当てられたのは、20フィート×24フィートの部屋（5～8人用）と、16フィート×20フィートの部屋（4人以下）の部屋だった。各部屋には天井灯が1つ、石炭ストーブが1つとクローゼットがあった。この部屋についても、先に述べたアメリカ日系博物館に展示されている。

一見は、アパートの部屋のように見えるが、実際、これで毎日生活するという事になれば、かなり精神的な圧迫を感じたであろうことは推測できる。

こうした不便な生活の中で教育、仕事など様々な問題を人々は解決しなければならなかった。家族も大切な心の支えになった事も確かだ、教会によるプログラムが多くできていた。

この中で注目するべきものは、成人教育プログラムである。渡米して以来、仕事に追われていた人々は、毎日持て余すほどの時間を持つことになり、美術教室、音楽教室、裁縫教室、生け花教室、手芸教室などが開かれた。

しかし、それ以上に、英語教室や米国研究講座が開かれたことは大きな意義がある。つ

まり、何も知らず異人として生きた日系一世が、自分の生きる国について、はじめてじっくり見つめなおすことになったわけである。

こうした内容は、これから述べるトパーズタイムズの中の記事にも多くみられる。

### 3 トパーズタイムズ

さて、「トパーズタイムズ」は、このトパーズ収容所の中で出版されたコミュニティー新聞である。これは、無料で各世帯に配布された、町の唯一のメディアだった。

1942年9月17日から1945年8月31日まで430号が日系人によって編集、刊行された。2006年研究した「ユタ日報」と違い、これは収容所の中での出版という特徴を持つ。「ユタ日報」は、日本語中心であったが「トパーズタイムズ」は、基本的に英字新聞であった。しかし、年を追うごとに、日系一世に対する情報伝達が必要となり、日本語の紙面が増え、それにともない俳句、短歌、エッセイなども姿を現してくる。

今回は、「ユタ日報」の中の日系文学作品の基礎となったエッセイや俳句や短歌が、どれだけ「トパーズタイムズ」の中に出てくるかに注目してみた。

なお「トパーズタイムズ」は、1990年に、日本で復刻された復刻版10巻（1942年11月10日～1945年8月17日）の中から研究をした。

「トパーズタイムズ」の主な目的は、収容所の人々がWRAの政策や通達を知り、日系人が1つのコミュニティーに生活しているという形をとりたいアメリカ側の意図により、記事の検閲は極めて少なかったという。この点は、第二次世界大戦開戦後、大半の日系新聞が出版中止となり女性の日系アメリカ人の出版ということで唯一認められた「ユタ日報」と大きく異なっている。そこで「トパーズタイムズ」と「ユタ日報」の大きな違いの一つ

は、新聞に掲載されている内容の違いである。「ユタ日報」は第二次世界大戦中も全米の日系人から文芸作品が投稿されてその内容が多く掲載されていたが、「トパーズタイムズ」は第5巻になってやっと短歌や俳句の作品がみられるようになった。これは収容所という特殊な場所に閉じ込められた日系人の感情を考えれば、自分達の気持ちを周りの人々に伝えるという心の動きが考えにくいのは、当然かもしれない。短歌や俳句の会が開かれるようになり様々な作品が発表されるまで二年の歳月を必要とした。一巻から五巻はすでに研究を進めたので、今回は第六巻からの作品を研究していきたい。

#### 4 トパーズタイムズの文学作品について

・第六巻 1944年1月1日～1944年4月29日  
1944年1月1日の新聞には俳句と短歌が多数掲載されている。

すさまじき世は世ながら年忘れ 重野流水  
国のため命捧しますをの 魂しのびつつ春  
を迎ふる 飯野たか子  
国交の破れてここに二とせの 由々しき道  
を歩みきしかな 村越光子

これらの作品を見ると人々が収容所の生活にそれなりに慣れて少しずつ自分達の心の中を語り始めているように思われる。

更に1944年1月8日には珍しく日記が載せられている。

「タンフォレンで生まれた男の子が、トパズで誕生日を向かえこの頃ではブロック中チョコチョコ走り回るようになり、皆から愛しきものに思われている。ある朝パパママを出し抜き食堂に来て列に加わり、ソーサーにホットケーキをもらっていつもの席につき、覚つ

かない手つきで食べ始めたので、皆が頼もしい笑顔をあげた。寸にも足らぬ幼鯉が瀧に登ろうとして沸き立つ滝壺を澆漑と泳ぎ回る健康な姿もみられてうれしかった。ベビーよ、やがては堂々と鳴り響く大瀧めがけて飛躍するのだぞ。」

これまでの短歌や俳句と違い、この文章では作者の具体的な気持ちが語られている。

2月22日にもトパズ短歌会として一面に作品が掲載されている。

名ばかりの門松さへもたつべき 家持つ  
ことのなきくらしかな 右山満泰  
子等の末思えば生活難き世に 出で行く友  
を今日も見送る 飯野たか子

この作品で注目したいことは、一つに門松という名前が出てくることである。このような収容所生活であってもやはり日本の文化にこだわりをもつ一世が多かったことを推察できる。更に飯野氏の作品からもわかるように、この頃になると少しずつ仲間が収容所を出て行くのである。しかし、収容所の外では今まで同様、またはさらにひどい差別や迫害を受ける可能性があるあるにもかかわらず、二世の今後を考えて、あえて出所する仲間がいて、それを複雑な気持ちで送り出す心を描いている。

さて6巻で何よりも注目したいのは4月1日にトシオモリの作品が掲載されていることである。

彼は、1920年にオークランドに生まれ、プロのスポーツ選手として活躍したが、やがて父の仕事を手伝うようになった。しかし、その傍ら、多くの一世たちと語り多くの短編小説を書くようになった。トシオ・モリについては、2001年の金城学院大学論集で取り上げ

ているが、この時には第二次世界大戦中の作品は入手できず、また活動についても具体的な資料を手に入れることができなかった。しかし、カリフォルニア州ヨコハマ町を翻訳した大橋吉之輔の後書きにはこのような内容が書かれている。

「トシオ・モリ氏は開戦とともに、荒涼たるユタ州トパーズの日本人収容所に収容され、1945年の終戦までそこにいた。皮肉にも、その収容所生活が、同氏にとってものを書く暇が一番あったときだそうである。」(トシオ・モリ、大橋吉之介、カリフォルニア州ヨコハマ町、p207)

この記述でもわかるように、モリ氏は新聞という媒体を通じて作品を発表し続けていたのである。それでは、ここで彼の作品を見ていきたい。

#### The Fruit Picker

“My boy is a soldier. My boy is a soldier,” sang Sakamoto, standing a top a fifteen-foot

Ladder and swinging a bucketful of apricots.” Oh, American soldier he is. My boy who is a good-natured kid by heart now carries a gun for America by necessity. He is an American soldier, he is.”

The low hoarse voice of the old Japanese fruit picker rang in the orchard near Provo, and the pickers perked up from their mid-afternoon drowsiness.

“Oh, Sakamoto! Fine singer you are!” someone shouted, chuckling. “what’s happened to the other song? We don’t hear it anymore.”

Sakamoto paused from singing and

peered through the branches to the next tree. “What other song, Fuji? I have forgotten.”

Laughter came from every near by tree. The place bustled with activity. The smiling men coming to unload their buckets into the boxes. The soft thud of outs dropping in the pails and the squeak of the ever-moving ladders.

“Sakamoto, how could you?” someone shouted again.” you know the song. About the girl in a beautiful kimono waiting for you in Japan.”

Laughter grew loud. Sakamoto resumed singing his new-found song, attempting to drown out his friends’ bantering, Jack the foreman grinned at Sakamoto from his post.

“Hey, Sakamoto,” he cried.” Don’t forget your boast. You vannot pick fast when you talk and sing.”

“I’ll pick a hundred thousand cots today.” the aged picker shouted proudly. “You watch, my friends. I pick for my boy, I pick for America.”

A cloud croased the sun’s path and the orchard escaped the direct rays momentarily. A cool breeze drifted in, and the men sighed with relief. Sakamoto, high up in the tree, sang with increased guest.

“Ah, America, this one is for you. Here is another for you. This one too. Another, another. I come seeking for gold in America. I will be rich in a your or two, I said .I will be rich in a year or two, I said .I will forget America, I said. With gold jingling in my pockets I will

sail for Yokohama, Is wore. Ten years. forty years. Sakamoto is still hers, my friends.”

What’s happened to Sakamoto? “someone shouted, laughing “ Sing and entertain us.”

“ Ah, another, America. For you, America. Yes, Sakamoto, the insignificant pigmy, was loaded with gold long ago. He sank his gold for another kind of gold....black gold. His eyes grow big with the dream of Texas oil. He sank some move. Soon he saw no more of his yellow gold nor black gold. but he is all right today.”

“You bet you are …You ought to retire,” someone shouted.

“An old man like you should stop work and take it easy,” Jack the for man advised.

Sakamoto looked at the foreman incredulously. “Stop? I ?What for? Sure, I can retire. But why should I stop work when my boy is serving for America? I too am an American. I built that boy up. I am a farther of an American soldier.”

“I am too,” someone shouted.

“Good for you,” another cried.

“My brother is in the army,” someone else chimed in.

Deveral trucks came to take the boxes away to the cannery. The sun sank a little to the west, and after the trucks roared away silence struck the orchard. But it was not for long. Soon the new world of Sakamoto’s song came clearly through the branches and the leaves.

“One for Uncle Sam. One for my boy

Joey. One for every American. One each for every mouth singing American spirit. One for Uncle Sam. One for my Joey. One for…”

The foreman looked up and smilingly shook his head as he watched Sakamoto’s nimble fingers work. “Sakamoto,” he cried. “What’s happened to your wonderful Japanese pears and persimmons? Have you forgotten their flavor? What about those tasty fish you used to catch in the Japanese waters? Don’t you get homesick for the gay festivals holidays? Speak up, Sakamoto.”

Sakamoto continued singing, his fingers working fast and skillfully. The pickers shouted encouragement and laughed. Sakamoto sang the phrases over and over, his voice finally breaking at the sight of an usually large apricot. He plucked it and tossed it to the foreman.

“For you, Jack,” he shouted laughingly. “That’s a special one. Eat slowly and taste its flavor. That is my answer to your questions, Jack. I want you to understand this fruit, the apricot.”

The foreman held the oversize fruit and studied with a puzzled look.” Talk English, Sakamoto. Your words have no meaning.”

“Don’t listen to my words, young man,” Sakamoto said, coming down with a full pail. “Look at the fruit. A little while ago it was a flower. When the flower dropped off we saw a green little thing. A green fruit is a strange thing. You see no value in it at the beginning. When it becomes ripe you begin to see

its worth and understand a little. That's how it is between America and me."

America and you?" asked Jack

The old man dumoed his load and smiled. He took his straw hat off and tapped his head. "I was once a green fruit, so was America in my immigrant days. Now we are beginning to get ripe, both of us, and the day will come when we'll open up and get to the core. Isn't it natural, young man?"

The foreman nodded his head and becomes solemn. The old man moved his ladder to another spot and went up. The sun became hidden in the trees. The sparrows now joined the chatters of the men, and the valley was ready for dusk.

Up ahead a friend called Sakamoto, "Have you news from your son Joey? What does he says?"

The old man stopped work momentarily, and his fingers trembled a little. His eyes twinkled in the dark. "Two days ago a nice long letter came from him. His letters are full of light and hope. Meets plenty of new Americans. Eats, sleep, plays and works like American...one big family. He is a young fruit but young people are getting ripe fast nowadays.

The foreman called time and a cheer went up in the far end. The men came hurrying to unload their pails. From one of the nearby trees Sakamoto began to sing a new line of his song. "This one and this one..."

Then someone in the crowd shouted, "let's watch Sakamoto pick, Sakamoto,

show your stuff."

The old man smiled blandly. He looked at the upraised faces of his friends and was pleased. He was the center of attraction. Nonchalantly he began to pick the cots. Slowly he picked one by one, until he began to warm up. Then his face sobered and the smile was gone. He increased his pace, his fingers nimbly going after the fruit among the leaves. Then his roar of a song was heard: "Count fifty in a minute my friends, for I am fast. Another ...another...another... another..."

The workers watched him admiringly and humbly. Someone in the crowd found his voice. "Come on, fellows!"

Let's follow Sakamoto and make use of our rest time!"

There was a soramble below the old man's tree. Ladder s bumped ladders and the "plunk" of the cots falling in the baskets filled the air, and the song of Sakamoto in defiance to the enemies of common people stirred many pickers to faster pace.

この作品は、その後出版された「カリフォルニア州ヨコハマ町」の中には掲載されていない。そこで、第2次世界大戦中に収容所内でモリ氏が書いた作品だと推測する。この「カリフォルニア州ヨコハマ町」は1942年に出版される予定だったが、1949年まで出版が延期された。これは、当時の日系人に対する排日感情が大きく起因していると考えられる。しかし、モリ氏が強制収容所に入れられても、あきらめずこのような作品を書き続けていたという大きな証拠として注目したい。

第六巻では、その後もいくつかの俳句、短歌を発表する紙面がみられる。どの作品も収容所で見つけたささやかな喜び、はっきりと口に出せない悲しみや不安がさりげない言葉を使って表現されているが、大半は日系一世の日本語によるものである。

- ・第7巻1944年5月3日～1944年8月30日  
5月10日の紙面にはトパズ短歌とポピイ4月句抄が掲載されている。

明日の日は如何になる身か知らねども 庭  
に種まくしたくはじむる 高橋猪久男  
民族の末の為ぞと自が命 捧げし魂を何に  
たとえむ  
愛し子を捧げし人の集まれば 黙し居れど  
も通ふ 飯野孝子

飯野孝子氏の作品は、当時の一世の母親の苦しみを代表して表現していると考えられる。戦後の日系アメリカ文学の中心となった442部隊にかかわる作品の根底にある心の表現として注目したい。

更に6月10日には、次のような作品も見られる。

諦めてその日その日は暮らせども 6軒長  
屋に親しみの湧く  
立ち並ぶ6軒長屋庭の辺に 花なき春と寂  
しくも見つ 岡田豊

この作品は、トパーズでの暮らしに不満ながらも落ち着いて生活できるようになった人達の様子が読み取れる作品である。

第7巻には他に7月10日、8月5日にも作品が掲載されている。この5日には、トパズ短歌について紹介されている。

「トパズ短歌会は、毎日最終木曜日午後7時より高枕ビル2のCDに於いて開催し、主

任田原紅人氏の歌についての鑑賞法と批評がある。投稿は何人にも自由、一人一稿3首限りのこと。」このような呼びかけが、多くの人達に伝わり新聞に多くの作品が掲載されるようになってきたのだと考える。

- ・第8巻1944年9月2日～1944年12月30日  
さらに第8巻でもさっそく短歌が発表されている。

兵を持つ親の心は怯ゆなり 相次ぎ来る悲  
しき知らせ 勢田清子  
血腥き戦場を思ひ夕焼けの山の端 眺めし  
づこころなし 高橋猪久男

この頃は442部隊に参加した日系二世に対する親心を読んだ作品が多く見られるこの内容はやはりユタ日報と同じ展開である。

さて先にも紹介したが第七巻にもトシオ・モリの作品が掲載されている。今度は子どもに関する内容になっている。

12月23日

Santa Claus is For Children

It was 20 nights before Christmas in Topaz when little, Min turned eleven. The hour was late for the children but they joined the family about the potbelly stove. On the homemade coffee table, was a plate of deviled ham sandwiches and another dish of steaming hot tamale.

“Boy! I'm the highness tonight,” Min cried, jumping into the most comfortable armchair. His eyes goggled as his mother served the tamale. “Boy, I like tamale.”

“This tamale is too hot,” his mother explained to Grandma. “I had bought the other brand.”



“I like 'em hot,” cried Min, bouncing up and down in his seat.

“Step that, Min,” warned his father.

Min jumped to his feet and whispered something in Uncle Harry's ear. They went on the other side of the partition.

“Do you know what I'm getting for Mom and Pop?” Min asked his uncle.

Uncle Harry watched his nephew amusedly. “No, what?”

“I'll tell you if you can keep a secret.”

Uncle Harry crossed his heart. “On my honor.”

“Min! Hurry back and drink your milk,” his mother said, “And don't keep Uncle Harry from eating.”

“I want to tell him something, Mom.”

“You come right back and finish your milk.”

The pair returned to the fireside. Uncle Harry gazed at Min with flesh interest. “Min, what did you get for your birthday?” he asked.

Min ran out of the room and returned quickly, his arms loaded with packages. “Look, Uncle Harry,” he cried opening the bundles excitedly. “See this army twill pants—just like yours!”

“He's proud of it,” his mother said, smiling.

“And look at my new shoes,” Min said, laughing and dancing. “And this jacket and this shirt.”

“These shoes are in the moccasin style,” his uncle said, examining them and realizing its size. “How you've grown lately.”

“And Granma gave me money. Now I

got four dollars and eighty-five cents in my toy bank,” cried Min happily.

“Aren't you sorry for being born in December—the month of Christmas?” reminded Uncle Harry, recalling his little nephew's everlasting sorrow of having his birthday so close to Christmas.

Min twisted his mouth in reply. He looked at his uncle quizzically and noting his twinkling eyes, said, “I am the highness tonight.”

“Stop that talk,” scolded his father.

Min subsided long enough to watch his grandmother pour coffee for the adults. He thrust out his cup to Grandma, screwing his face. “I want coffee.”

“No. Drink your milk,” his mother said.

The family members chuckled. Coffee was Min's secret passion. For a sip of coffee he would jump up and down with joy, as if he had tasted the nectar of the gods. “Just a wee bit, Grandma,” he pleased.

Grandma slowly poured an eighth of a cup of coffee.

“Boy! My big day,” cried Min, making eyes and raising his cup.

“What do you want for Christmas?” Uncle Harry asked his little nephew.

Min cocked his head sagely. He had turned eleven, the age when the fable of Santa Claus is at the lowest ebb of credulity. “I'll write it down,” he said wisely.

“Don't bend Santa Claus's back by ordering too much,” advised Uncle Harry.

“Uncle Harry, lend me your pencil and

paper," he said, going to his uncle's writing table. "Come here, Uncle Harry."

Min attempted to keep a straight face as Uncle Harry approached him. He watched as the latter searched his drawers. "Do you have enough pencils and papers?" he asked anxiously.

"Oh, yes, I can spare some for you," Uncle Harry said. He found several sheets of typing papers. Now he looked for his pencil box.

Min peeked here and there, his eyes darting anxiously as if his opportunity might slip away.

"How much does this book cost?" he said, holding up a copy of "Prejudice: Japanese Americans: Symbol of Racial Intolerance.

"Three dollars."

The boy whistled.

"What's the matter, Min?"

"Oh, nothing," he fingered the ink bottle reflectively. The bottle was full. He signed deeply. "Uncle Harry, do you know what I'm going to get for Grandpa?" he said suddenly.

Uncle Harry perked up. His face broke into a smile of understanding as Min chuckled impulsively.

"Have you got a present for him?" Uncle Harry asked in a whisper.

Min nodded confidentially. "Don't tell Grandpa. He's going to get a writing tablet.

Uncle Harry nodded approvingly.

"Tomorrow I'm going to the Canteen to buy Grandpa's present."

"Any idea what it's going to be?"

Uncle Harry said, his eyes twinkling for want of seriousness. Then he affectionately rubbed his little nephew's unruly hair.

"I'm not rich, you know," Min defended himself.

Uncle Harry chuckled. "Who's rich anyway?" Then he added, "If you can give you're rich though."

"Gee, I'm in a fix," Min said, scratching his head and looking about Uncle Harry's quarters.

"What's eating you, Min?"

"Say! You often write to Uncle Mas in the army," Min said eagerly. "Do you have enough air mail envelopes?"

Uncle Harry smiled. He amusedly looked into his drawer and studied his envelope supply. He had enough for a year. "By gosh," he cried aloud. "I'm running low. I'll have to get some at the Canteen."

Min looked up hopefully. "I bet they cost a lot, Uncle Harry?"

Uncle Harry brought out a pack and showed it to Min. "Then sends a pack."

"Yeah?" eagerly cried Min, doing a jig.

"Yes. That's right, Min," Uncle Harry said. He chuckled as he added, "Isn't Christmas getting to be a headache for you?"

Min shook his head emphatically. "No, Uncle Harry. I like Christmas."

Uncle Harry nodded in agreement.

"I see you still believe in Santa Claus," he said gladly, watching the face of a happy one who is a cross between the roles of give and take.

この作品は12月23日の新聞に掲載されている。クリスマスを前に作られた作品であるが、その内容はトパーズでのクリスマスを過ごす子どもと叔父の会話を中心に書かれている。このようにトパーズの地名を出した作品は注目できると考える。

同日、トパーズ短歌の作品も掲載されている。

30年を毛筆持たぬ手に筆執りて書けるわが  
名の哀れげに見ゆ  
すべあれば消えも失せむと思ふなり吾が書  
く文字の拙きを見つ 太田かの宏

この作品は、今まで文を書くことの無かった一世達が、せめて自分達の気持ちを残しておきたいと考えた思いを表した作品と考えられる。

さらに27日にもトパーズ川柳が掲載されている。

言い足らぬ思いを秘めて25字 茶里

この日の作品は孫に関するものや、新年に向けての思いが多く載せられているが、先に紹介したこの川柳が一番人々の作品を作る動機を語っていると考えた。

・第9巻 1945年1月3日～1945年4月27日

第9巻になると文芸作品の掲載が一気に減少する。この頃になるとだんだん収容所から出ていく人の数が増えることも原因の一つだと考える。そんな中で興味深い見出しを見つけた。

RADIO PROGRAM DRAMATIZES  
STORY OF SGI KUROKI

Sugi Kuroki は、空軍に所属する青年で

あるようだ。そしてこの青年がどのように空軍で生活したかがドラマ化されるという内容である。このように二世の物語がドラマになるというのは当時において大変珍しいことだったと考える。

さて2月24日には久しぶりにトパーズ短歌が掲載されている。

ひしひしと迫り来れる寒風を身に感じつつ  
年を迎ふも 福井萬可  
新年の朝まださまず吾が心 神に迎ひて歩  
みはじめたり 勢田清子  
諸々の人の情けは縁遠く しのびまつりて  
年を越へけり 志賀邦彦

どの作品も前向きに生きる人々の姿を表しているとは言いがたい。この頃、人々は、収容所を出た後の生活について恐れたり苦しんだりしていたという。そのような事情を表した作品と言えよう。

3月3日にはポピー会の俳句が掲載されている。

加州へ帰れても帰られぬと老人の髭が白い  
松野南龍  
日毎戦線へ行く顔戻った顔のステーション  
片井溪嵩

この頃の作品は、同じような内容が多い。表現は違うが、今後に不安を感じる人々の心境が語られている。

第九巻は4月3日の作品が、最後になる。

並んで行く黙っていく年寄りと兵隊 高木好文  
話すことも無くなった兵と母と暖炉が更ける 林夏樹  
兵になって帰った兵とブラックマネジャと

メスの前の柳 松野實樹

このように224部隊に参加した二世に対する作品が多く見られる。この巻には日本語の俳句、短歌以外に目立った作品は見られなかった。

第10巻 1945年5月1日～1945年8月31日  
トパーズタイムズ最終巻は、今までの巻よりも紙面が少なくなっている。しかし、この最後の巻には多くの短歌や俳句が掲載されている。5月15日には雪をテーマにした川柳も掲載されている。しかし残念ながら印刷が不鮮明なので個々に紹介することができない。5月25日には川柳が掲載されている。

越し方の四十年は夢の様 愛子  
秘々と祖国を偲ぶ郷土歌 春子

この時期になってもまだ一世の気持ちの中には故郷が大きな比重を占めていたのだろう。6月1日にはトパズ短歌が掲載されている。

春長けて加州帰還の友多し 病持つ身の言  
ふすべもなし 廣瀬比美  
転住の思ひみじんもなかりと 決めし心を  
直にこたへり 石山清寿

いよいよ収容所が閉鎖される日が近づき既に収容所を去った人が多い中でまだ残っていた人たちは、何か理由があるわけで、その理由は、この短歌の作者のように病気だったり、アメリカ社会に飛び出す勇気がなかなかでなかったからだと言われている。後者の作品は、自分に対する言い聞かせの内容と推測する。

6月15日には、トパズ吟杜にも、同じような内容がみられる。

転住の友と行く春惜しみけり 中村梅夫

転住の思案もつかず春暮れる 服部猷零

さらに、日本の戦況がますます悪くなってこの時期には、故郷を憂う作品も見られる。

日々変わる戦況になど迷はじと 思へどまた  
も心さわぐも 和佐りん  
何事も運命のままにまかせ置き 徒然のま  
ま尺八を吹く 松野三壽

二つの祖国を持つ人々は、故郷に残す親族の身を案じ、また442部隊でアメリカのために命をかけて戦う息子達の無事を祈り続けた。しかし、なすすべも無くただ日々が過ぎていく。そんな気持ちを尺八という日本の楽器で紛らすというのは何ともアンバランスな当時の一世の姿をよく表している。

7月27日には、トパーズタイムズ最後の俳句が掲載されている。

別れ惜しみつつ送る雨の若葉しなだれ 米  
倉久枝  
夏が青々と最転住しなさる 米倉林泉

いよいよ収容所が閉鎖されていく。今まで肩を寄せ合って生きていた日系人達は、ふたたび差別の渦巻くアメリカ社会へ戻らなければならぬ。この後の日系人達の苦労話は、長い月日を経て多くの二世三世の作品に登場するが、一世が自分達の気持ちを発表するのは、これが最後となるが多かった。人々は、収容所での体験を作品にすることも、口にすることも無くなっていったのである。

## 5 「ユタ日報」と「トパーズタイムズ」の作品比較

これまでこの研究において述べてきたよう

に、この二つのコミュニティー新聞は、発行された地域の環境が大きく違うことに注目したい。ユタ日報について、次のような紹介がある。

「第2次世界大戦勃発後発禁処分を受けていたユタ日報が再刊されたとき、祖国日本へのシンパシーや、『大和民族』『日本国の臣民』というアイデンティティーは完全に隠匿し、逆にホスト国アメリカに同化、順応して政府の国策に全面的に追従する姿勢を徹底させた。…さらに、発刊停止処分の影響もあっただろうが、連邦政府と日系人をつなぐ情報チャンネルとしての役割をよりいっそう自覚するようになり、日系人にかかわる重要な情報を読者にもれなく伝え、人心を安定させ、日系人コミュニティーを一つにまとめようと努めた。」(水野剛也、「日系アメリカ人、強制収容所とジャーナリズム」, pp243~244)

「相互関係づけ機能の一形態として、『ユタ日報』は、収容者から寄せられた文芸作品(俳句、川柳、短歌、詩、散文、小説、随筆など)も積極的に紙面化している。1942年5月27日号では、「サンタ文芸」を、第二面前面に使って掲載している。(水野, p257)」

このように、ユタ日報の研究をした時は、多くの文芸作品、小説を取り上げることができた。しかし、「トパーズタイムズ」は、収容所にいる日系人に情報を伝えることを主としているので、なかなか文芸作品を掲載する機会が無かったのであろう。

始めは、どこで生活に必要な物資が手に入るか、また学校がいつ開校するかなどの情報が主流であった。しかし、人々が多くの時間をどのように使うかを考え始めた時、やっと自分達の楽しみに時間を使おうという気持ちになってきた人たちがあらわれた。そして多くのサークルが開かれるようになった。紙面に文芸作品がみられる前にも、文芸サークル

への参加が何度も呼びかけられている。このような準備無く文芸作品が生み出されるチャンスは無かったのである。

### 終わりに

先に述べたように、「トパーズタイムズ」の一卷から研究をはじめた時、どのページを開いても文芸作品が見当たらず、今後このテーマで研究が続けられるか不安であった。しかし、3巻4巻と調べていく中で短歌や俳句の会への参加を呼びかける記事も見られるようになり、それにしたがって6巻以降多くの作品が掲載されるようになった。以前トパーズタイムズを研究した時は、別のテーマであったので気づかなかったが、これほど人々が文学に触れるのに時間がかかることを改めて感じさせられた。

日系人の歴史を研究していく時、収容所に入って始めて趣味を見つけたり勉強する時間が見つかったというコメントを数多く目にしてきたが、この新聞の中でもその傾向がはっきりわかる。そして、日系一世が自分たちについての体験を恥じて、多くを語らなくなった時、これらの作品が、歴史的資料として、またその後活動が盛んになった日系アメリカ文学の貴重なヒントになったことは、間違いない。

更に、トシオ・モリの作品が掲載されていたことで、はっきりしなかった、彼の収容所時代の作家活動についても知ることができた。日系二世たちの作家としての戦時中の活動を知るきっかけになった。今後は、ロサンゼルス中心に今も発行されている「羅府新報」についても研究を広げていきたい。「羅府新報」からは、多くの文学者が出ていると言われている。どのような作品が掲載されどのような人が作家になっていったかも注目して研究を続けたい。

注

トパーズタイムズは文語体でかかれており、また印刷の不鮮明なものが多い。解読の困難なものは、口語体に書き換えている。

Work Cited

- 岡本彩子，アメリカを生き抜いた日本人，日本経済新聞社，東京，1980。  
トシオモリ，大橋吉之輔，「カリフォルニア州横浜町」，毎日新聞社，東京，1992。  
日系人強制収容所新聞「トパーズ・タイムズ」，日本図書センター，東京，1990。  
水野剛也，「日系アメリカ人 強制収容とジャーナリズム」春風社，横浜，2005。

Work consulted

- 黒川省三，「アメリカの日系人」，教育社，東京，1979。  
鶴田真，「日系アメリカ人」，講談社現代新書，東京，1976。  
村上由見子，「アジア系アメリカ人」，中公新書，東京，1997。  
若槻泰雄，「排日の歴史」，中央公論社，東京，1971。  
M・O・タンネル&G・W・チルコート著，竹下千花子訳，「トパーズの日記」，金の星社，東京，1998。

Work consulted

- 黒川省三『アメリカの日系人』教育社，東京，1979  
鶴田真『日系アメリカ人』講談社現代新書，東京，1976  
村上由見子『アジア系アメリカ人』中央公論社，東京，1997  
若槻泰雄『排日の歴史』中央公論社，東京，1971  
M・O・タンネル&G・W・チルコート著，竹下千花子訳『トパーズの日記』金の星社，東京，1998